橋姫考

松村　博[1]

[1]正会員

E-mail: hmatsumura@leto.eonet.ne.jp

現在でも橋の近傍に橋姫を祀った小祠が残されているところがある。それにまつわる伝承も伝えられている。それらは歴史的事実とは異なるが、広い意味では歴史そのものであり、大切な遺産でもある。橋にまつわる伝承がどのような背景で生まれ、語り継がれてきたかを解明することは、橋の本質を知ることでもある。本稿では、橋姫伝承に焦点をあてて、伝承の収集と背景の解明を試みた。関連が深い人柱伝承も含めて、橋の境界性、橋建設に対する敬意などが伝承の背景にあることを検証した。そして、伝承の文化的な解明の他に、技術的検討の可能性にも言及した。

Key Words : *Traditions of Hasihime, Sacrifice for Bridge Construction,Folklore*

１．橋姫伝承

橋には様々な怪異譚が伝えられてきた。その代表的な例が橋姫である。全く過去の話ではなく、現在も橋の袂に橋姫を祀った小祠が守られているところがある。それにまつわる物語も伝えられている。本稿では橋に伝えられてきた怪異な物語を通じて、古来より先人が橋に対してどのような幻想を共有し、感情移入をしてきたかを、橋姫をキーワードにして考察し、できれば、日本の橋の特徴を把握したい。

(1) 橋姫を祀る神社

現在も橋姫の小祠が残されている橋を表－1 に挙げる。

表－1　現存する橋姫社

	場所	橋名	河川名	神社名	文献
1	京都・宇治	宇治橋	宇治川	橋姫神社	1)
2	三重・伊勢	宇治橋	五十鈴川	饗土 橋姫神社	2)
3	岡山・岡山	京橋	旭川	橋姫稲荷 大明神	?
4	宮城・仙台	広瀬橋	広瀬川	橋姫明神社	6)
5	栃木・日光	日光・神橋	大谷川	橋姫社	2)
6	福島・ 会津若松	闇川橋	闇川	橋姫社 (姥堂)	3)
7	〃・ 〃	日橋	日橋川	橋姫社 (姥堂)	3)
8	滋賀・大津	瀬田唐橋	瀬田川	橋守神社 (龍宮社)	2) 5)

(2) 宇治の橋姫[1)]

京都・宇治の宇治橋の「橋姫神社」は橋の南西詰 100m 強の所にある。近世には北西詰にあり、それ以前は橋の三の間の張出部に祀られていたと伝えられている。

宇治橋は橋姫にまつわる豊富な物語を持っている。

『平家物語』の「剱巻」に橋姫の起源譚がある。平安時代の初めの頃、ある公卿の女が、男に捨てられたのを憎み、貴船神社に七日間詣で、生きながらに鬼となり、憎いと思う女にとりついて殺したいと神に祈った。貴船の神は、本当に鬼になりたければ宇治の川瀬に二十一日間つかっていればよいと託宣した。女は京に帰り、髪を五つに分け、松脂で固め、顔に朱をさし、身体には丹を塗り、頭に金輪をかぶり、その三本の足にたいまつを結びつけ、両側に火を付けた一本のたいまつを口にくわえ、大和大路を南へ向かって走り出した。そして宇治で二十一日間水につかっていると、本当に鬼になったという。

これが宇治の橋姫であるともいわれている。この物語は、能の『鉄輪(かなわ)』に脚色されるなど、有名であるが、原初的な話ではなさそうである。

『古今和歌集』巻 14 に、

さむしろに　衣かたしき　今宵もや
　我を待つらむ　宇治の橋姫（よみ人しらず）

の和歌があることから、橋姫のイメージは 10 世紀初めにはすでに広まっていたことになる。

平安末から鎌倉初期に書かれたとされる歌学書『袖中抄(しょうちゅうしょう)』には宇治の橋姫は橋の下に住む神で、そこへ離宮（宇治神社）の神が毎夜通い、その神が帰る暁にはおびただしく浪立つ音がするという伝承を載せており、また別に住吉明神が橋姫のもとへ通ったとする言い伝えも紹介されている。

橋姫に関するいくつかの物語があるが、藤原清輔の『奥儀抄(おうぎしょう)』下巻に『橋姫の物語』にあるものとして紹介されている。

「昔、妻を二人持つ男がいた。もとの妻が病気になって七色の若布をほしがった。男はそれを求めて海辺に行き竜王にさらわれてしまった。もとの妻が男を尋ねあるく

うち浜辺の庵に宿をとったところ、男に会った。男は「さむしろに」の歌を口にしながら海辺にあらわれ、事の次第を話して消えた。今の妻はこの話を聞いて、男に会いに行き、待っていたが、男がこの歌を口にしながらあらわれたので、自分を思いすててもとの妻を恋しがっていることを妬ましく思い、男につかみかかったところ男も家も雪が消えるように消え失せてしまった。」

この説話は『古今集』以降に作られたと考えられるが、古くからの説話にこの歌のイメージが重ねられているかもしれない。さらに江戸時代の地誌『山城名勝志』では、地元に伝わる話として、「昔、宇治川のほとりに夫婦が住んでいたが、男が竜宮へ財宝を求めて行ったまま帰ってこなかった。女は恋悲しんで、この橋のたもとで死に、神となった。これが橋守明神である。」とされている。

桑原博史は、このような説話は、漁業従事者の水死が、水底の竜宮へ行って帰ってこなかったいう形で形象化され、妻の行動が橋姫に結び付けられ、伝承化されたと推論している[4]。

『古今集』の歌などが橋姫に与えられた王朝時代の女性のイメージを増幅させることになったと思われる。そのイメージを定着させたのは『源氏物語』の「宇治十帖」であろう。薫君を中心に展開される物語の第一帖が「橋姫」であるのは物語の内容を暗示している。

橋姫は時代が下るとともに恋の嫉妬に苦しむ女性の神に変化していった。そして恋人を待つ女性の「愛(は)し姫」のイメージが次第に強くなっていった。

宇治の橋姫の説話を文献の年代順に並べてみてもそれほど意味のないことだろう。宇治の橋姫も橋守として橋を守る神であった可能性があるが、地元で原初的な説話が生まれ、この景勝地を訪れた平安貴族の文学的想像力によってイメージが膨らんでいったと考えられる。

写真—1　宇治・宇治橋・橋姫神社

写真—2　仙台・永町橋（広瀬橋）・橋姫明神社と橋供養碑

(3) 他の橋姫社

a) 伊勢・饗土(あえど)橋姫神社[2]

伊勢神宮内宮の入口に架かる宇治橋の北西およそ 200m の所にあるが、かつては橋の西詰に祀られていた。饗土とは神をもてなす土地という意味で、祭神は宇治橋を守護する神である。宇治橋は式年遷宮に合わせて架け換えられるが、渡り初めの際にはこの神社で儀式が行われる。

b) 瀬田唐橋・龍宮社（橋守神社）

唐橋の東南詰に龍宮社と秀郷社が並んで祀られている。龍宮社は橋守神社とも言われ[5]、社の縁起では古くは橋そのものを神社として、龍神の依り代が設けられていたとされる。秀郷社は藤原秀郷、すなわち俵籐太を祀る。俵籐太の百足退治の話は『太平記』15 巻を始め、長く語り継がれてきた。俵藤太が勢多の橋を渡っていくと巨大な蛇が寝そべっていた。ゆうゆうとこの大蛇を踏みつけて歩いていくと、怪しげな小男が現れ、自分は橋の下に二千年余りも住むものだが、蛇は人の強胆さをはかる手段であったと言う。そして、藤太の勇気を見込んで、自分達の敵を倒してほしいと嘆願する。承知した藤太は、湖の下にある龍宮へと案内され歓待を受けていると、巨大な百足が襲ってくる。藤太は強弓でこの百足を射止め、龍神から感謝されて都へ帰ったとされる[2]。

瀬田唐橋の下には龍宮があるとされていたのは、京都・宇治橋と共通する。この他、瀬田唐橋にはいくつかの怪異譚が伝えられているが、それについては後述する。

c) 日光・神橋[2]

神橋は刎橋構造になっている。左岸側は改造されているが、右岸側の桁は岩盤に穴を掘って埋め込まれており、古い形態が守られている。架け換えに当たって右岸上流側の桔木（乳木ともいう）を岩の穴から引き出すことを外遷宮、新しい乳木を差し込むことを正遷宮といい、その岩穴の中には橋姫が祀られている。別に小祠が設けられ、橋姫社とされており、対岸に祀られた二荒(ふたらさん)山の神、深砂(じんじゃ)大王と男女一対の神として橋の安全を守るとされる。

d) 仙台・広瀬橋

広瀬橋の西詰の植え込みの中に、橋供養の碑と橋姫明神の小祠、そしてかつて永町橋と呼ばれたころの礎石が残されている。橋供養とは新しく橋の工事が完成したときに橋の安全を祈願して行われる儀式で、その供養碑は長町側で運輸の業務に携わっていた木場連によって建てられた。永町橋には次のような橋姫伝説がある。

「この地に初めて橋を架けることになったが、長雨続きで広瀬川は氾濫し、橋を架けることができなかった。これは竜神の怒りで、信心深い若い娘を人柱にしなければ架けられないと相談しあった。そのとき長町根岸の長者の一人娘が人柱になることを申し出た。娘は儀式に従って十八夜観音堂に籠って断食をした後、川べりの木箱に入り埋められた。祈りの声と鉦の音は続いていたが、やがて途絶えた。すると川に光が射し、大水は見る見る引いて、無事橋を架けることができた[6]。」

e）闇川橋、日橋

柳田国男は会津地方の 2 橋の橋姫社を簡単に紹介している[3]が、筆者は現地を確認していない。地元では姥堂と言うが、「おんば様」とも呼び、石像も伝えられているようだ。橋の守り神であるとともに安産の神でもある。

柳田は「尾張熱田の精進川の姥堂も、裁断橋の詰に祀るのを見れば、一箇の橋姫祠とみて差支えがない」[3]としている。ついでに言えば、越中立山の麓、芦峅寺に架かる布橋の袂にあるうば堂も橋姫につながるものであると言える。裁断橋、布橋については文献 2)参照。

f）橋姫の性格

橋姫が祀られた理由、その性格をみると、以下のように分類できる。

・工事成就のための人柱
・橋の守護神
・境界の神

これらは一つずつに分けられるものではなく、複数の性格を有しているものもある。

２．橋における人柱伝承

橋の建設にあたって、人を生き埋めにすることによって成就したとする説話が広く伝えられている。筆者が把握できたものを下表に示す。

表－2　人柱伝承を持つ橋

	場所	橋名	河川名	文献
1	沖縄・豊見城	真玉橋	国場川	7)
2	山口・岩国	錦帯橋	錦川	8)
3	徳島・徳島	福島橋	助任川	9)
4	徳島・石井	渡内橋(綿打橋)	渡内川	10)
5	長野・長野	久米路橋	犀川	11)
6	神奈川・横須賀	夫婦橋	平作川	12)
7	宮城・仙台	広瀬橋(永町橋)	広瀬川	6)
8	大阪・大阪	長柄橋	神崎川?	14)
9	島根・松江	松江・大橋	大橋川	2)

(1)　長柄の人柱

人柱伝承のうちで、最も古く、広く流布しているのが、長柄の人柱の伝承である。大阪の長柄橋の人柱については、昨年の土木史研究会において報告した[13]。

少し繰り返しになるが、その概要を示す。大阪に流布している「長柄の人柱」の伝承[14]のうち、『芦分船』（延宝 3 年(1675)刊）のものがその原型となるものであろう。その概要は、「むかし、摂津の国難波の岸と垂水の里はその間 2 里、数十の島があった。重要な往還であったが、橋は幾度も頽落した。安定した島橋を造るためには人柱が必要であるとして詔勅によって、垂水のほとりに関を造って、人柱を探すことになった。垂水の里に岩氏という人がいて、関を越えるとき戯れに、袴のまちに継ぎのある人を人柱にすれば成功すると言った。役人が見ると、岩氏の着た袴に継ぎがあった。直ちにとらえて人柱にした。おかげで島沿いの地は豊饒の地となった。勅宣により人柱を沈めた所に寺を建て、岩氏の冥福を祈らせた。これが今の大願寺である。」これには後日談があり、「岩氏には娘があり、河内の禁野に嫁した。まったく物を言わないので、夫は母のもとへ帰すことにした。（中略）妻を垂水へ送る途中、雉鳥が鳴いたのを夫が射たのを見た輿中の妻は大声で歌を詠んだ。

ものいわじ　父はながらの　橋ばしら
　　なかずば雉鳥も　いられざらまし

夫は妻がものを言ったのを喜んで、家に引き返したが、今その地を雉鳥縄手という。」とある。

『摂陽群談第 8　野の部』（元禄 14 年(1701)刊）では、娘の名前が光照前になっている。正徳 2 年(1712)に成立した『和漢三才図会』では、巻 74 摂津に大願寺、巻 75 河内に三本杉雉子塚を分けて紹介している。これらに続く、『摂津名所図会』や『河内名所図会』にも少し内容を変えながら、同様の話が採録されている。そして、現在、大願寺に隣接して「長柄人柱巌氏碑」（昭和 11 年建立）が建てられており、垂水町にも「雉啜碑」（大正 10 年）があり、伝承を今に伝えている。

長柄の人柱の伝承はかなり古くから伝えられており、14 世紀中頃には成立したとされる『神道集』の「橋姫明神ノ事」で長柄の人柱の話が取り上げられている。

「長柄の橋は度々架けられたが成功しなかったので人柱を立てるべく内々の相談をしていた。ちょうど通りかかった妻子連れの男が、架けても難しい橋には浅黄の袴に継ぎを当てた人を人柱に立てればいいと言った。妻が継ぎを当てていたことを知らなかった男は橋柱とされたが、ともに人柱とされることになった妻は悲しんで一首を詠み、橋柱に結び付け、幼子とともに川に身を投げた。この女がここの橋姫となった。人々は哀れんで橋の際に社を建て、橋姫明神として祀ったという。」

伝承地近傍には橋姫明神が祀られた祠は伝えられていないが、この『神道集』の物語が橋の人柱としては最も古いものであると考えられる。

文献 15)には、信濃・長良橋、大和・名柄橋、紀伊・長柄橋などに摂津の長柄橋とほぼ同様の人柱説話が伝えられているとされているが、筆者は確認できていない。

(2) 他の橋の人柱伝承

a）沖縄・真玉橋

那覇市と豊見城市の間の国場川に架かる真玉橋は、琉球王国時代の 1708 年に石造アーチ橋に架け換えられたが、この橋にも人柱伝説がある[7]。「真玉橋の架けかえのとき、首里から七色のムーティー（元結）をしている女を人柱にしなければならないと言ってきた。ある女が同調したところ、当の女が七色の元結を付けていたので、人柱にたてられることになった。彼女は娘に「ひとさきもものを言うな」との言葉を残した。娘は父とともに国頭村謝敷に逃れたが、後に謝敷で板干瀬で貝を取っていた娘を、首里の侍が見初めて連れて帰った。娘は再び口をきくようになって幸せに暮らした。人柱になった女は橋の右側にある社に祀られている」とされる。

b）岩国・錦帯橋

錦帯橋は延宝元年(1673)9 月 30 日から 10 月 1 日の間に現在の形の木造アーチ橋が完成し、10 月 3 日に往来が始まったが、翌年の 5 月 28 日の洪水によって橋脚が崩れ、アーチ橋部分が流失したとされている。直後に再建

に取り掛かり、その年中に完成した。そのとき施工された護床工のおかげで、橋の橋脚は昭和25年(1950)に流失するまで276年にわたって持ちこたえた[17]。

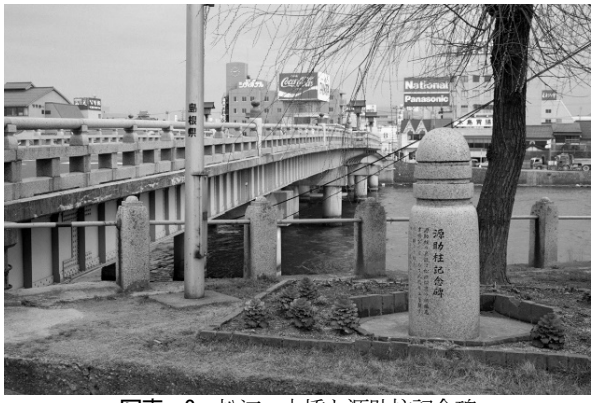
この再建時に人柱が立てられたとする伝承が生まれたようである。工事にあたって人柱を立てようと相談していると、「横継ぎのあたった袴をはいた人を人柱にしたらどうか」という提案があり、早速調べたところ、提案をした男の袴に継ぎがあった。その男は人柱になることを受け入れたが、その人には二人の娘がいた。親思いの娘は悲しんで、人柱になることを止めようとしたが、男は人柱が必要なことを説き、娘を慰めた。すると、娘たちは父親に代わって人柱になることを願い出た。そうして娘たちが人柱になって橋台の下に埋められ、橋は立派に完成した。その後、錦帯橋の下の石の裏側に小さな「石人形」がついているのが見られるようになった。石人形は2㎝以下の小さなもので、人々は「人柱になった娘たちが姿を変えたものだ」と信じるようなったという[8]。ちなみにこの石人形はニンギョウトビケラという昆虫が川の中の小石や砂を集めてつくる巣である。

c) 松江・大橋[2]

大橋の人柱伝説としては、小泉八雲が『知られぬ日本の面影』に記した物語が広く流布されている。

慶長年間に出雲の大名となった堀尾吉晴が、初めてこの河口へ橋を架けようとしたとき、大工たちがいくら骨を折っても、うまく行かなかった。ここには、柱を支える堅固な河底がないようであった。たくさんの巨石を投げ込んでも、効果がなかった。昼間行った工事が夜の間に流されたり、完全に河底に呑み込まれてしまうこともあった。やっと橋が架かっても、すぐに柱が沈みはじめてしまう。おまけに洪水のために、半数の柱が流されてしまうこともあった。

そこで、水神の怒りを鎮めるために人身御供を捧げることになり、まち（内股の部分になどに足した布）のない袴を着けて橋を渡ったものを、生贄として埋めるという手はずになっていた。そこへ通りかかったのが、雑賀町に住む源助という男で、彼の袴には、運悪くまちが着いていなっかった。こうして源助は、水流のもっとも激しい中央の柱の根元に、生きながらに埋められてしまった。橋はそれから300年の間、びくとも動かなかった。そして、いつしか、橋の中央の柱は源助柱と呼ばれるようになり、月のない深夜、その柱のあたりには鬼火が飛ぶようになったという。



写真―3　松江・大橋と源助柱記念碑

この物語には、いくつかの異説がある。袴の破れに横縞の布でつぎを当てていた人を捕まえて人柱にしたとする話や、まちのないあんどん袴をはいている人を人柱にすることを提案したのは、源助自身であったとする話も伝えられている。

なお、現在の新大橋の南詰に式内社である売布（めふ）神社が祀られているが、この神社は15世紀には「橋姫大明神」と呼ばれていたことが確かめられている[16]。なぜ「橋姫」と呼ばれたかは不明である。

d) 阿波の福島橋[9]、綿内橋[10]

徳島県にある2つの橋も人柱伝説を持っている。助任川に架かる福島橋では難工事がうまく進むようにと、工事を始める日に通りかかった六部（巡礼僧）に懇願して人柱になってもらった。棺に入ったまま、49日の間、鉦が打ち鳴らされており、橋は立派に完成したという。人柱が埋められたとされる石積の橋脚は現在も残されており、壊さないように歩道部が大きく曲げて造られている。また、石井町の渡内橋では、その昔、朝一番に渡った綿打を捕えて、人柱に築き込んだと伝えられている。

e) 信濃・久米路（くめじ）橋

刎橋として有名であった信濃の久米路橋にも人柱伝説がある。昔、久米路橋は大雨のたびに流され、川の神の怒りを鎮めるために橋を架けるときに人柱を捧げることになったが、囚人をあてようとして、庄屋の家から小豆ともち米を盗んだとして牢屋につながれていた一人の貧しい農夫を橋の下に生き埋めにした。

その男には一人娘がいたが、病気になったとき、「あずきまんま（赤飯）が食べたい」と言ったので、庄屋の家から盗んで食べさせた。回復した娘が子供仲間に赤飯を食べたことを話したことから、盗みがわかって牢に入れられた。父を失った娘は一言も口をきかなくなってしまった。時がたち、キジが鳴いたのを聞いた猟師が鉄砲で撃ったのを見たその娘は、「キジも鳴かずば撃たれまいものを‥‥」[11]と言ったが、父を死なせた自責から、その後も言葉を口にすることはなかったという。

(3) 人柱について

橋にまつわる人柱の他に、池や堤防の建設にあたって、また、築島や築城の石垣建設時に人柱が立てられたとする伝承があり、さらに洪水や海上での暴風雨を鎮めるために身を捧げた話も伝えられている。特に治水施設の建設に関する人柱説話は日本各地に広く残されているが、これらの話の内容には類似点が多い。

柳田国男は「松王健児（まつおうこんでい）」や「松浦佐用媛（まつらさよひめ）」などを代表例にして各地に残る民話集、すなわち広い意味での文学作品を丁寧に読み込んで、民話が伝播した経緯や歴史的背景を詳細に検討している。そして、『妹の力』[18]の中で、「説話の内容は常に史実でない」としたうえで、「主として学びたいと思う点が、記録証文をもたない平の日本人の過去があるゆえに、こうして彼らの取り伝えている昔の物、ことにその中でも複雑にして特徴の多い説話の類を、粗末にする気にはなれぬのである。この目

的から言うと、幾分かもっともらしく史実くさく見える物語よりも、思い切って奇抜な信じにくいもの、たとえば人柱・橋柱というような話の方が、いっそう取扱いには便利である。」と、人柱伝承をそのまま収集することが大切で、史実とすることには否定的に述べている。

一方、南方熊楠(みなかたくまぐす)は『人柱の話』[19]で日本のみならず、諸外国の類似の例を数多く紹介しており、「本邦の学者今度の（江戸城の）櫓下の白骨の一件などにあふとすぐ書籍を調べて書籍に見えぬから人柱など全く無かったなどいふが、（中略）大抵マジナイ事は秘密に行ふもので人に知れるときかぬといふが定則だ。」として、人柱の存在を肯定的に捉えている。

南方の記述の中には、宗教的な自殺行為や殉死も含まれており、それらは歴史上の事実と認められる。

しかし、筆者は次のような例から、日本では構造物の建設に際して意に添わず、神への捧げものとして殺された事実はなかったものと考えている。

例えば、『仁徳紀』11 年条に「茨田(まんだ)堤」の築造に際して、天皇の夢に神の啓示があって「武蔵人強頸(こわくび)・河内人茨田連衫子(ころもこ)」の二人を河の神に祀ることになった。強頸は泣き悲しんで水に入って死に、堤が完成した。一方、衫子は二つの匏(ひさご)を河に投げ入れて、「河の神が自分を必要としているならこの匏を沈ませよ。その時は真の神と知って、自ら水に入ろう。沈まなければ偽りの神であるとしよう」と言った。匏は浮き上がって流れていき、衫子は死ぬことなく、堤も完成した。古代においてもこのような合理的な判断が可能であったことの証拠となる。

また、『垂仁紀』32 年条に皇后日葉酸媛(ひばすひめ)が亡くなったとき、天皇が「殉葬は良くない。何かいい手段はないか」と訪うた。野見宿禰(のみのすくね)が「陵墓に生人を埋めることは良くありません。今後のためにも別の方法を考えるべきです」と奏上して、埴輪を飾るようになったとあるが、古墳時代もそれ以前の弥生時代の墓からも生贄の証拠は見つかっていない。

３．怪異譚を持つ橋

(1)　柳田国男の「橋姫」

柳田国男は、全国に伝えられた橋にまつわる怪異譚を丁寧に収集して、女性が主人公となる多くの物語を「橋姫」（『一目小僧その他』[20]及び『山島民譚集(三)』[3]）にまとめている。

山梨県国里村（現在の甲府市）にあった国玉(くだま)の大橋を通る者が橋の上で猿橋の話をすると必ず怪異が起こる。猿橋の上でこの橋の話をしても同様である。昔、武蔵国から甲州へ来る旅人が、猿橋の上でふと国玉の大橋の噂をしたところ、一人の婦人が出てきて、甲府へ行かれるならばこの文を国玉の大橋まで届けてほしいと言った。男は手紙を預かったが、いかにも変なので途中でこれを開いてみると、中には「この男を殺すべし」と書いてあった。男は大いに驚き、早速その手紙を「殺すべからず」と書き改めて大橋まで来ると、橋の上に一人の女がおり、いかにも腹立たしげな様子であったが、手紙を開いて見ると機嫌が良くなり、礼を述べて何事もなく別れた。

この他にも、橋にいた不思議な婦人が手紙を託したという話がいくつか紹介されている。

また、これらの橋の上で、謡曲「野宮(ののみや)」や「葵の上」をうたうと、道に迷ったり、鬼女が現れるなど奇怪なことが起こるとされた。或る人が国玉の大橋の上で「野宮」を少しうたってみたところ、しばらく行った所で美しい婦人が乳呑児を抱いてやって来て、この子をしばらく抱いていてくださいと言う。ふと見ると鬼女の姿になったので一目散に逃げ帰ったが、玄関で気絶したという。

乳呑児を通行人に抱かせようとする妖怪は産女(うぶめ)とよばれ、出産時に死んだ女性の霊で、鳥にも変身したとされるが、人に害を与え、畏れられていた話が伝えられている。一方で益をもたらすこともあった。

橋に現れた産女の例では、鎌倉・大巧寺(だいぎょうじ)の産女の由来がある。『産女霊神縁起』[21]によると、五世住職日棟上人が、ある夜、妙本寺へ詣る途中、加能橋(別説では夷堂橋)の下に痩せた赤子を抱いた血まみれの女がいた。尋ねると、難産で死んだが、死出の旅路の途中で迷っているという。上人が回向をすると、後日、成仏できたお礼にと、金銭を差し出し、供養塔を建ててほしいと頼んで消えた。

秋田・横手の蛇(じゃ)の崎橋の袂に産女が出たという言い伝えがある。これを与謝蕪村が絵にしており、子供を抱いた女の妖怪が一人の武士に怪力を授ける様子が漫画風に描かれている。画中に「出羽国横手の城下蛇の崎が橋、うぶめのばけもの」との注があり、ある武士が、雨の降る夜、このばけものに出会い、力をさずかり、その後蝦夷合戦で手柄をたてたとされる[22]。

(2)　橋に現れた鬼

『今昔物語』巻二十七に勢田橋にまつわる話がある。

美濃国の紀遠助が帰郷の途中、近江の勢田橋の上で婦人に小さな箱を託され、これを美濃の段の橋の西詰にいる女に届けてほしいと頼まれた。家に持ち帰り、うっかり忘れていたが、それを嫉妬深い妻が開けてみると、箱の中に人の目玉などが入っていた。夫婦ともに気味悪く思い、男が段の橋へ持って行くと、女が出ていてこれを受け取り、この箱を開けて見たらしい、憎い人だと凄い顔をして睨んだ。家に帰ると病気になってほどなく死んだという。

同巻に、東国から京へ上る人が、勢田橋で鬼に出会う話もある。勢田橋の辺の無住のあばら家に泊まったところ、深夜になると、鞍櫃から鬼が現れた。男は必死になって馬で逃げ、勢田橋まで来たが、逃げ果せないと考え、橋の下に隠れ、観音に助けを念じた。橋の上では恐ろしい声で叫んでいたが、何者かが「下にいる」と言って、出て来た。物語は以下が欠文になっている。

また、同巻に、近江の安義(あぎ)の橋の話がある。近江の守の館の若者たちが昔ばなしなどをしている中で「此の国の安義の橋を無事通りおおせたものがいないというわさだ」と話したところ、ある男が肝試しをしようと、馬を借りて出かけた。橋に来ると、薄紫の衣に紅の袴の美女が立っていた。女が人里まで連れて行ってほしいと頼むが、妖しげなので恐ろしくなり、馬に鞭打って逃げた。正体を現

した鬼が追いかけてきたが、その場は何とか逃げ果せた。ところが後日、弟に変身した鬼が屋敷にやってきて、男は首を食い切られてしまった。

京の一条戻橋にも鬼が出た。京の若侍が六角堂に熱心に参詣していた。十二月の晦日の夜に一条戻橋を西へ渡っていたところ、西から鬼の一団がやってきた。男は急いで橋の下に隠れたが、鬼に気付かれ、上に引き上げられて唾を吐き懸けられた。男は急いで家に帰ったが、家族は話しかけようともしない。男は鬼の唾で姿を消されたことに気付いて六角堂の観音に祈念したところ、元の姿に戻ることができた（『今昔物語』巻十六）。

『平家物語』や『太平記』の剣巻にも一条戻橋に現れた鬼の話がある。源頼光の四天王の一人、渡辺綱が名刀髭切を佩いて馬に乗って戻橋を渡っていると東詰で二十歳ばかりの美女に出会った。五条辺りに用があるので送ってほしいと頼まれ、馬に乗せてしばらく行くと、鬼の姿になり、綱の髪をつかんで愛宕方面へ飛んで行った。そこで髭切を抜いて鬼の腕を切り落としたが、北野社の境内に落ちた。

(3) 「人ねたき」境

以上のような説話が生まれのは橋の境界性が強く意識され、神霊が宿るところと観念されていたためであろう。

柳田国男は、橋や坂は村落の境界をなし、避けて通れない場所であるため、境を守るべき神を祀ったとする[20]。その神は境の内に住む人が出ていくときには安全を守り、怒れば人の命を取り、悦べば財宝を与えるという両面性を持つものである。境の神はもとは男女の二神で、最も他人を近付けたくない処、古い意味での「人ねたき」境を守るには男女の神霊があれば必ず偉い力をもって侵入者を防ぐと信じられた。そして「橋姫」の最初は男女二神で、それゆえに同時に安産と小児の健康も守ることになったと説明している。「ねたみ」とは古くは憤りや不承知などを意味したが、しだいに男女の情のみをあらわす言葉に変化したとされている。こうして橋に宿る神は、当時の女性が置かれた立場とも関連していると考えられるが、嫉妬深い女性の神に変化していった。

4．境界としての橋

境界という概念は人が作り出した共同体の境というだけではなく、人の住む所と自然、此界と他界、俗世と人の力が及ばない聖なる世界にまで拡張される。人は境界に神を祀らねばならないほど畏怖を抱いていた。人知が及ばない向こう側は聖なる場であると同時に不気味で恐ろしい場所でもあった。人為的な境界である橋は冥界への入り口にも、蘇生の場にも変化した。

(1) 京・一条戻橋

平安京の宮城の東のはずれに位置した一条戻橋に蘇生伝承が伝えられている[23]。延喜18年(918)、文章博士であった三善清行（みよしきよつら）が亡くなったとき、その子浄蔵は修行中の熊野から急いで帰京すると、ちょうど父の葬列が橋の上を通りかかるところであった。父に会いたいと思い、神仏に祈願したところ、清行は一時的に蘇生して、浄蔵と言葉を交わすことができた。これによって「戻橋」とよばれるようになったとされる。

戻橋では橋を通る人の話し声を聞いて吉凶を占う橋占（はしうら）が行われたことが、古い物語集などにみえている。また、『源平盛衰記』では陰陽師（おんみょうじ）の安倍晴明が十二神将を戻橋の下に呪をかけて封じ込めて必要な時に呼び出したとされる。このように戻橋は、宗教的雰囲気の強い場所であり続けたようである。

(2) 越後・応化（おうげ）の橋

現在の直江津の郊外の関川には古くは応化の橋（おうぎの橋）と呼ばれる橋が架けられていたと伝えられる。この橋にまつわるいくつかの伝承によって橋の位置や性格が浮きぼりにされてくる。説教節「さんせう大夫」ではこの橋が重要な場面を構成している。

話は永保年間（1081～3）のこととされる。岩城判官であった父をたずねて旅に出た安寿姫、厨子王丸、母と乳母の四人は直井の浦（直江津）に差しかかる。ところがここでは人売りが横行し、地頭からの指示で旅の者に宿を貸してはならないことになっていた。途方に暮れた四人は浜路から戻る女に会い、おうぎの橋の下で一夜を明かす事をすすめられる。四人のことを知った人買いの山岡大夫は橋の上へ行き、前後を知らず眠っている四人に「この橋は供養のない橋であるから山からうわばみが舞い下り、大蛇が上って夜な夜な逢って契りをこめ、暁方になって別れるのでこの橋をおうぎの橋という。その蛇が人を取って食うと聞く」と言っておどす。そしてついに山岡大夫にだまされた母と子は別の船に乗せられ、東西にわかれて売られていく。

岩崎武夫はこのような説話が生まれた背景には応化の橋が直江津の町はずれにあり、「無縁の地」として認識されていたことをあげている[24]。境界にあり、どこにも属さない場は、誰にでも自由に宿として利用できる場所でもあり、供養のない荒廃したイメージの所でもあった。この物語は少し形を変え、高田瞽女（ごぜ）の語る祭文「山椒大夫」によっても広く伝えられたとされている。

(3) 芦峅寺（あしくらじ）・布橋[2]

越中・立山の麓、芦峅寺にうば堂川（姥ケ谷）という深い谷を越える布橋と呼ばれる朱塗りの木橋がある。江戸時代、この橋では毎年秋の彼岸の中日に極楽往生を願う女性の救済のための宗教儀礼、布橋灌頂会（かんじょうえ）が行われた。立山は女人禁制の山であった。布橋灌頂会は中宮寺（芦峅寺）をあげての宗教行事で、閻魔堂（えんま）に集まった信女たちは死装束である白衣をまとい、閻魔大王にこの世の罪障を悔い、裁きを受けた。ここから対岸まで敷かれた白い布の道を通って堂に詣でた。信女たちは目隠しをし、衆僧が法楽を奏でる中、引導師の阿闍梨（あじゃり）に導かれて念仏を唱えながら布橋を渡った。布橋は迷いの此岸から悟りの彼岸へ渡る橋とされ、仏法を信じない者は橋から谷底へ落ちて毒蛇に巻かれて死ぬと説かれた。

うば堂には大日、弥陀、釈迦如来に当たる三体のうば尊像が祀られ、その脇には江戸時代の国数にちなんで六六

体の尊像が安置されていたという。堂内を密閉し、その中で秘密の儀式が行われたが、僧の勤行（ごんぎょう）、念仏三昧の後、東の扉が開かれると神仏が宿る立山が夕日に映え、あたかも浄土世界が現出したような思いに達したという。

(4) 他界へ通じる橋

柳田国男の『遠野物語拾遺』[25]一五七、一五八に概ね次のような話が載せられている。「ある人が若い頃病気で発熱するたびにきまって美しい幻を見たそうである。（中略）言葉ではなんとも言い表わせぬほど綺麗な路がどこまでも遠く目の前に現れる。萱を編んだような物がその路に敷かれてあり、そこへ自分の十歳の時に亡くなった母が来て、二人が道連れになって行くうちに、美しい川の辺に出る。その川には輪形の橋が架かっているが、見たところそれは透明でもなく、また金や銀でできているのでもない。その輪の中を母がすうっと潜って、お前もそうして来いと言うように、向こう側からしきりに手招きをするが、自分にはどうしても行くことができない。そのうちにだんだんと本気に返ってくるという」また別の人の話として、「急に腹痛を起こしてまぐれる（気を失う）ことがあったが、（中略）街道を急いで歩いて行って、立派な橋の上を通りかかったところが、唐鍬を持った小沼寅爺と駐在所の巡査とが二人で遮って通さないので戻ってきたと語った。」

このような〈離魂譚〉に対して、吉本隆明は『共同幻想論』「巫覡論」[26]の中で、「高熱にかかった村の病人の自己幻覚がたどるのは〈亡母〉であり、〈橋〉のむこうにいて手招きする亡母とそれをわたりかねている病人に象徴される伝承概念としての〈他界〉と〈現世〉である。〈橋〉はこのばあい子供のときからきかされていた土着仏教の〈三途の川〉の橋であっても、仏教以前の古伝承としての霊のあつまる高所と人のあつまる村落とをへだてる川の〈橋〉であってもよい。これらはいずれも遠野の村落の共同幻想の歴史的現存性の象徴を意味しているからである。〈離魂譚〉の村の若者や病人が嗜眠状態で自己幻覚をたどらせる対象は、彼らに親しい個人である〈他者〉ではなく、母胎のような村落の共同幻想の象徴である。」と明解に説明している。

5．まとめと考察

(1) 女性の神が宿る橋

日本人は橋には女性の神が宿ると観念していたようである。つまり、橋を女性的なイメージで捉えていたと言えそうである。ヨーロッパの言語の名詞には男性、女性の区別があるように事物に関するイメージはその風土に規定される。

保田與重郎が『日本の橋』[27]の中で、「日本の橋は概して名もなく、その上悲しく哀れっぽい」と表現したように橋は頼りない存在であった。古くは日本の橋は細い杭に支えられた木の橋で、急流の川に出水があると簡単に流されてしまう、自然の猛威の中ではまことに頼りなく、か弱い存在である。ある場合には、浮橋のように流れに逆らわず、したたかに生き残る工夫も持っていた。それが文学的な想像力をかきたて、橋のイメージを膨らませていった。それが当時の女性の置かれた境遇とも重ねられて、女性的なイメージが定着していった。

上述のように、他界に恐怖心を抱いていた人々は居住地、集落、街、国などの境界に畏怖を感じた。そこは自分たちの意識、支配が及ばない場所、いわば無縁の場[28]であった。特に川に架かる橋は境界性を強く意識された存在であった。

橋姫の原初的な形態は橋の袂に祀られた男女二神で、強い霊力によって内側に入ろうとするものを防いだとする柳田国男の説明は概ね妥当であろう。そこには産女が現れたり、得体のしれない女性が奇妙な頼みごとをすることもあった。一方、女性の神が橋を守る神と考えられ、具体的に近傍に祀られることにもなった。そして橋の存続への願いが橋そのものを神とすることもあった。

(2) 供養としての人柱

架橋をはじめ、築堤や築城にあたって生身の人間を捧げたとする伝承が全国的に残されている。人柱信仰が根底にあったことは確かであろう[30]が、人柱が事実であったすることには筆者は否定的である。歴史上、主君に殉じた武士もいたし、即身仏のように宗教的確信から自ら死を選んだ人がいたことは事実であろう。しかし、意に添わず、生贄となったとする確証はないように思える。今後の詳細な発掘調査などで明確な証明がなされることがあるかもしれないが、現状では、肯定はできない。

確証はないが、人柱とは、供養を象徴化したものではないかと考えている。建設工事中の事故で亡くなった人がかなりいたと考えられるし、橋であれば橋から転落して亡くなることもあったし、旅の途中で橋の袂で行き倒れになることもあったはずである。さらに、橋の近傍で水難事故によって亡くなった人は竜宮へ行ったとされたと推測されている。

これら諸々の非業の死を遂げた人を供養する心情が人柱の伝承を生んだのではないだろうか。供養することによって橋の安全と旅の無事が守られることにつながると考えられたのであろう。特に建設中の事故で亡くなった人を現場に葬ることがあったかもしれない。近年でも殉職した人の慰霊碑を近傍に建立した例は多い。

関東には「石橋供養碑（供養塔）」が広い地域に残されている。文献29)によると、関東の他、九州でも見られるようであるが、近畿、中部地方ではほとんど見ることができない。建立されたのは近世以降である。この供養碑は主として石橋（板石橋が多い）を建設したときに、橋の永続、旅行者の安全、さらに民の安穏を祈願して建てられたものである。中には仏像が彫られていたり、塞の神が共存しているものもある。石橋の寄進者が建立したものがほとんどであるようである。

橋供養とは本来は橋が完成したときに、橋の永続を願って行う儀式で、人柱の意味するものとは異なるが、橋の永続を祈る心情は共通するものがあるように思える。

(3) 技術的検討の試み

人柱伝説の内容を若尾五雄が技術的観点から説明しようと試みているのは興味深い[31]。長柄橋の人柱伝承では、袴に継ぎのある人を人柱にしたことになっている

が、「袴」は衣服だけではなく、酒徳利を据え置く台を指すこともあり、橋柱の裾を円形の土台石で丸くつつんでいるところを「袴の腰」というように、橋柱に「袴をつける」工法、つまり、橋柱の基礎工法であるとしている。また、『民俗学辞典』に「袴の横継ぎ」となっているのを引いて、橋柱に（斜めの）支柱をつけることであるとして、「長柄の橋の人柱とは橋柱に袴型の支柱をつけること」と結論付けている。

しかし、長柄の人柱を紹介している古い文献では、「浅黄の袴に継ぎを当てた人」（神明集）、「袴のまちに継ぎのある人」（芦分船）などとあるように、「袴の横継ぎ」という表現はない。また、近世以前の絵画や文献に主柱を支える斜材が使われた例は見当たらない。

また、柳田国男が「松王健児の物語」（『妹の力』[18]）で紹介している豊前・宇佐の神領の堰の建設に際して、人柱を選ぶ際、7 人の袴を水に投げて、沈んだ人に決めたが、その後、鶴という女性とその子が板輿乗せられて川に沈められたという話に対して、「袴とは梯型のものをいい、（中略）水に袴を沈めるとは、井堰の両側に張り出した部分が水の中でその裾を長くひいている型をいう」とし、さらに、母子が板輿に乗せられて沈められたのは、「沈床工法」をいうと説明している。

しかし、『平家物語』巻六には、経ヶ島築造に際して、人柱を立てねばならないほどの難工事であるが、人柱の代わりに石の面に一切経を書いて築いたとされており、また、文献の年代は明確ではないが、築城や築堤に際して人柱を立てたとする伝承も多くあり、「袴型」工法だけでは説明できそうにない。

柳田国男は、人柱伝承で「松王健児」の他に「松浦佐用媛」というキャラクターを紹介しており、「美女を水の神の牲とした話が、奥羽地方の各地に伝わっているが、その美女を松浦佐用媛とするものが多い。（中略）佐用媛人柱の物語が広く各地に分布していることは、これを運搬した者があったことを推測せしめる。（中略）佐用媛のサヨは塞の神を意味し、松浦のマツは神あるいは貴人に対する奉仕を意味する言葉である。したがって松浦佐用媛は固有名詞ではなく、本来は遠く遊行して諸国の神の祭に参与した一群の女性を意味する言葉であった。」（『民俗学辞典』）などと説明している。

これに対して若尾は「松浦」はマツラで、もとは造船用語の竜骨のことで、築堤では「粗朶を敷きその上に石を置く工法」とし、サヨは水を塞ぎり、堰（せ）くことでもあると技術的観点から説明しようと試みている。

ただ、古い和船には竜骨は用いられておらず、マツラは明治以降、西洋技術を取り入れた構造で、明治以前から伝えられてきたと考えられる伝承に適用するのは無理があると考えられる。

柳田のように文芸的側面から伝承を解釈するだけではなく、技術的側面からアプローチするのは大切であると考えるが、一側面からの解釈に陥らないように注意しなければならない。

あとがき

橋姫、人柱などをキーワードにして日本の橋の特徴について考察した。先人たちは、橋の場への畏怖、建設者への感謝と供養、橋存続の願望など、様々な感情から生まれた物語を語り継いできた。全国的に類似の伝承が定着しているのは、それらを伝えた人たちがいたことは確かであろうが、各地に橋に対する共通の認識が存在していたからである。それについての問題提起を行うことはできたが、議論は十分ではない。このような問題に興味を感じていただける人と議論ができれば有難いと思う。

また、今日では日常、橋の存在を意識することはほとんどなくなっているが、このような伝承を思い起こすことも大切であると思う。これらを顕彰するために、例えば、行政が橋姫社を保護することは難しいが、存続する環境を整えることや広報することは可能であろう。

〈参考文献〉

1）松村博：『京の橋物語』, pp. 39～47, 松籟社, 1994. 9
2）松村博：蛇の崎橋、日光・神橋、直江津橋、伊勢・宇治橋、瀬田唐橋、宇治橋、長柄橋、京橋、松江・大橋、芦峅寺・布橋、裁断橋，『日本百名橋』, 鹿島出版会, 1998. 8
3）柳田國男：山島民潭集（三）、『柳田國男全集 5』, 筑摩書房, 1989. 12
4）桑原博史：宇治の橋姫伝説と橋姫物語、『國語と國文学』36－6, 1959. 6
5）平林章仁：『橋と遊びの文化史』, pp. 9～16, 白水社, 1994. 7
6）仙台市図書館編：要説宮城の郷土史, 1970. 3
7）中村史：沖縄・豊見城村の伝説「真玉橋の人柱」,『人文研究』第 97 輯 1999. 3
8）山口県小学校教育研究会国語部編：『山口の伝説』, 1978. 11
9）徳島市ウェブサイト：福島橋の人柱伝説 2018. 2
10）柳田國男：橋の名と伝説,『柳田國男全集 7』1990. 1
11）宮澤清治：防災歳時記－キジも鳴かずば撃たれまい,『 消防防災の科学』No. 101, 2010. 夏
12）神奈川県ホームページ：夫婦橋(横須賀市), 2020. 3
13）松村博：行基架橋考,『土木史研究講演集』Vol. 40, 2020. 6
14）牧村史陽：『大阪の伝説 3　長柄の人柱』, 史陽選集刊行会, 1968. 3
15）田中清：長柄橋(人柱伝説雑考),『土木学会誌』46-1, 1961. 1
16）川岡勉：京極氏の支配と橋姫大明神, 松江市史 PLUS, 2021. 3
17）岩国市：『錦帯橋調査報告書』, 2020. 3
18）柳田國男：妹の力,『柳田國男全集 11』, 1990. 1
19）南方熊楠：人柱の話,『続南方随筆』, 岡書院, 1926. 11
20）柳田國男：一目小僧その他,『柳田國男全集 6』, 1989. 12
21）産女霊神縁起-縦 (ec-net.jp)
22）佐川良視：蛇の崎橋に産女の化物,『横手郷土史資料』第 30 号, 1958. 3
23）飯島吉晴：村境と橋,『自然と文化―橋』, 1984. 6
24）岩崎武夫：説教「さんせう太夫」と境界性,『文学』45-8, 1977. 8
25）柳田国男：『遠野物語付遠野物語拾遺』, 角川出版, 1955. 10
26）吉本隆明：『共同幻想論』, 河出書房, 1968. 12
27）保田與重郎：日本の橋,『日本の橋』, 角川書店, 1960. 1
28）網野善彦：『無縁・公界・楽』pp. 164～176, 平凡社, 1978, 6
29）石橋・敷石供養塔 (kinsei-izen.com)
30）宮田登：献身のフォルク,『怪異の民俗学 7 異人・生贄』, 河出書房新社, 2001. 5
31）若尾五雄：人柱と築堤工法,『怪異の民俗学 7 異人・生贄』, 2001. 5

(2021. 4. 19　受付)